

高校新設事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報

鹿伏・中所遺跡

平成 7 年度

1 9 9 6 . 3

香川県埋蔵文化財研究会

例 言

- 1, 本書は、高校新設事業に伴い平成7年度に実施した鹿伏・中所（ししぶせ・なかしょ）遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。
- 2, 本調査は、香川県教育委員会高校教育課（新設高校準備室）からの依頼を受け、香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
- 3, 本年度の調査組織は以下のとおりである。

総括	所 長	大森 忠彦
	次 長	真鍋 隆幸
総務	参 事	別枝 義昭
	係 長	前田 和也
	主 査	大西 健司（平成7年5月まで）
	主任主事	西川 大（平成7年6月から）
	主 査	西村 厚二
調査	主任文化財専門員	廣瀬 常雄
	参 事	糸目 未夫
	係 長	大山 真充
	文化財専門員	西村 尋文
	文化財専門員	中村 昭浩
	調査技術員	松尾 歩

- 4, 調査にあたっては、次の機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同敬称略）香川県土木部建築課、香川県長尾土木事務所、三木町新設高校準備室
- 5, 本書の執筆、編集は西村、中村が行い、浄書は松尾が行なった。
- 6, 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S A : 棚列	S B : 掘立柱建物	S D : 溝	S E : 井戸	S H : 穫穴住居
S K : 土坑	S P : ピット	S R : 自然河川	S T : 土壙墓・土器棺墓	
S X : 不明遺構	S Z : その他の遺構			
- 7, 描図の一部は、国土地理院地形図（1/25,000）を使用した。

本文目次

I. 調査の経緯と経過	1
II. 調査の概要	1
III. 遺構・遺物	
(1) 弥生時代中期	3
(2) 弥生時代後期～古墳時代前期	4
IV. まとめ	10

挿図目次

図1 遺跡位置図、周辺遺跡分布図	2	図10 III・IX区遺構配置図	7
図2 鹿伏・中所遺跡調査区割図	2	図11 S D28～31断面図	7
図3 S H70平・断面図	3	図12 S D31出土土器	8
図4 S H69平・断面図	3	図13 S R02断面図	8
図5 S H68出土土器	3	図14 S R01下層出土土器	10
図6 S H74平・断面図	4	図15 S R01断面図	11～12
図7 S H71平・断面図	4	S Z03～07平・断面図	
図8 S T01～18配置図	5	図16 鹿伏・中所遺跡南半部遺構配置図	13～14
S T16～18平・断面図		図17 鹿伏・中所遺跡北半部遺構配置図	15～16
図9 S H71出土土器	6		

写真目次

写真1 I区東端部全景	1	写真9 S D31遺物出土状況(1)	7
写真2 S H70検出状況	3	写真10 S D31遺物出土状況(2)	7
写真3 S H74検出状況	4	写真11 S R01・02全景	9
写真4 S T16検出状況	5	写真12 S Z03～06検出状況	9
写真5 S T17検出状況	5	写真13 S Z04・05細部	9
写真6 S T18検出状況	5	写真14 S Z05細部(1)	9
写真7 IX区全景	6	写真15 S Z05細部(2)	9
写真8 S D28, 29断面	6		

表目次

表1 墓状遺構一覧	9
-----------------	---

I. 調査の経緯と経過

香川県教育委員会は、木田郡三木町鹿伏地区において、平成8年度開校を目標に県立高校を建設する計画を進めた。この計画に係る埋蔵文化財保護について、香川県教育委員会は、平成6年度に試掘調査を実施し予定地の一部、面積にして15,391m²の範囲で、保護措置が必要であることを確認した。

その試掘結果にもとづき香川県教育委員会は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下センターと略称）に発掘調査を委託し、当センターは平成6年度より7年度まで二か年にわたって調査をすることになった。本年度調査は二か年目の調査にあたる。

平成7年度の調査は直営方式で実施した。調査対象面積は2,350m²を測る。調査は平成7年4月より南校舎（I区）・南水路部分から着手し、次に自転車置場（IX区）へと抜け、最後に店舗移転の問題で着手できなかった東水路④の一部の調査を実施し、同年9月末日に終了した。

I区、南水路②③は昨年度に調査したII区より伸びる弥生時代中期～古墳時代前期の集落域と、集落の南辺に流れる自然河川、IX区は集落の東辺を流れる自然河川等の遺構が検出された。本年度の調査で最も注目されるのは自然河川の中から出土した多量の遺物と、堰状の遺構である。

II. 調査の概要

対象地は「白山」から西方へ伸びる低丘陵の先端に位置する微高地及びその南外縁部に位置する。昨年度調査を実施した、II～VIII区の微高地上では、弥生時代中期～古墳時代前期の集落を検出した。この集落は周辺地域の拠点集落と考えられ、南北160m、東西140mの範囲で確認した。住居跡の数では竪穴住居跡約70棟、掘立柱建物約20棟検出した。本年度の調査区は、この集落が展開する微高地の南辺部分にあたる。

検出した遺構・遺物は少量中世を含むが、主体を占めるのは弥生時代中期～古墳時代前期までの遺構・遺物である。I区、南水路②③では、II区から続く弥生時代中期の竪穴住居跡群及び弥生時代後期後半～後期末の土器群群、微高地の南辺を流れる弥生時代後期末～古墳時代前期の2条の自然河川（S R 01・02）を検出した。また、この自然河川（S R 01）からは堰状遺構（S Z 03～07）を検出した。IX区ではI区から続く弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の自然河川（S R 02）とその河川より分岐する複数の溝群（S D 28～30）と微高地上より流れ込む溝（S D 31）を検出した。なお、先の溝群のうち（S D 31）からは弥生時代後期後半の土器がコンテナ約80箱出土している。

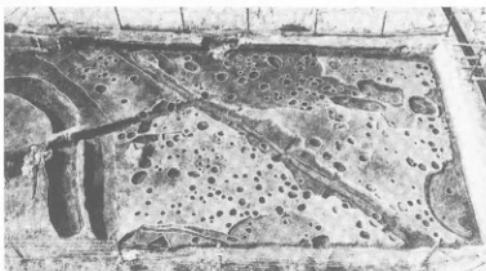


写真1 I区東端部全景



- 1 鹿伏・中所遺跡
- 2 天神山古墳群
- 3 烏内大谷西古墳群
- 4 狸地藏南丘古墳
- 5 白山1遺跡
- 6 白山2遺跡
- 7 白山3遺跡

図1 遺跡位置図。周辺遺跡分布図 (1/25,000)

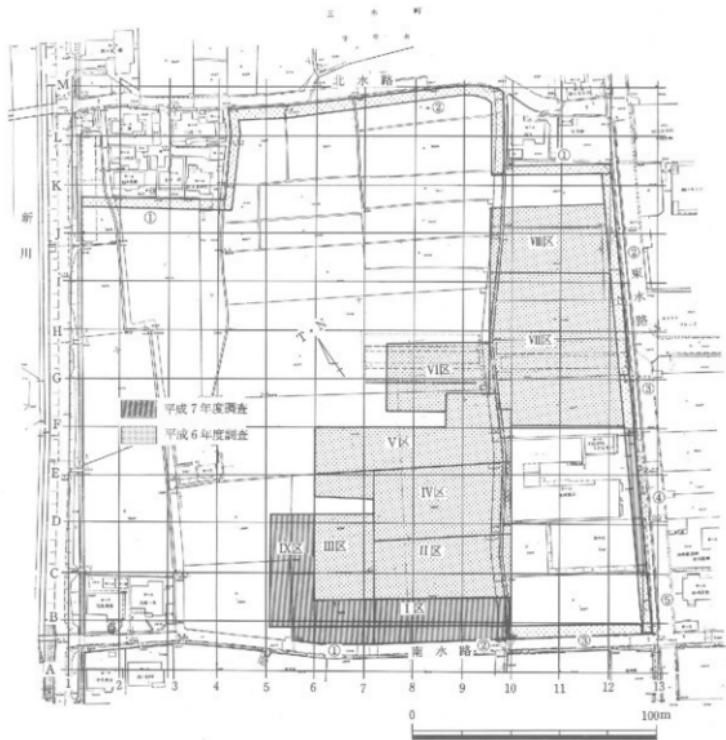


図2 鹿伏・中所遺跡調査区割図 (1/2,000)

(注:一辺20mのグリッド名は南と西の2本の線番号より与える。例: A 1)

III. 遺構・遺物

(1) 弥生時代中期

S H70 I区東端で検出した、長径約4.6mを測る、円形の竪穴住居跡である。東半分は調査区より外れるため1/2しか検出できていない。明瞭な主柱穴と考えられる柱穴は検出できなかった。住居の外周には壁溝が巡る。床面南よりの位置に横円形の土坑西半部を検出した。この土坑は形状より炉跡の可能性がある。この住居跡の出土遺物は少量で時期の決め手に乏しいが、弥生時代中期中葉以降の可能性が高い。

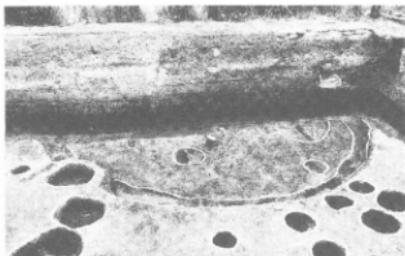


写真2 S H70検出状況

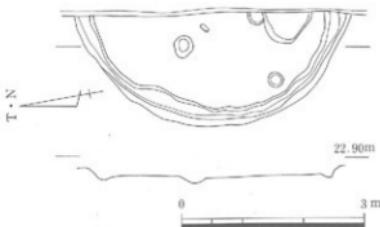


図3 S H70平・断面図 (1/80)

S H69 I区東端で検出した、長径約4.8mを測る、円形の竪穴住居跡である。南半分は調査区より外れるため約1/3しか検出できていない。また、西端部はS H68に切り込まれている。主柱穴は2主柱穴検出した。径約0.2m、深さ0.2mを測る。検出面積が小範囲のため構造及び時期等不明瞭な点が多いが、時期的な点では弥生時代中期中葉以降の可能性が高い。

S H68 I区東端で検出した、長径約5.5m以上を測る、不整円形の竪穴住居跡である。東端部はS H69を切り込んでいる。南半分は調査区より外れるため約1/4しか検出できていない。住居の外周には壁溝が巡るが、掘形ラインと壁溝ラインがくいちがうため、建替えの可能性がある。検出面積が小範囲のため主柱穴等の構造は不明瞭な点が多い。

出土遺物は少量であるが次の3点を図化した。(図5-1)は筒形土器の下部である。外面に刺突紋、底部に2つ1

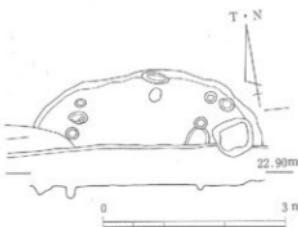


図4 S H69平・断面図 (1/80)

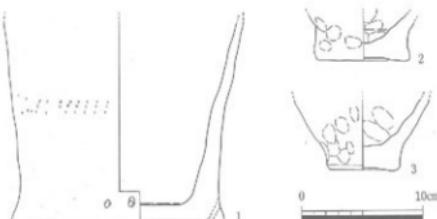


図5 S H68出土土器 (1/4)

組で2対の穿孔を施している。(2)は壺、(3)は壺の底部である。出土遺物よりこの住居跡は、弥生時代中期中葉以降の可能性が高い。

(2) 弥生時代後期～古墳時代前期

S H74 東水路④で検出した、長径約4.8mを測る、隅丸方形の竪穴住居跡である。西半分は調査区より外れるため約2/3検出した。かなり削平を受け、深さは約0.1mを測る。また、上面より炭化材が認められるため焼失家屋と考えられる。主柱穴は2主柱穴を検出した。主柱穴は小型で径約0.4m、深さ0.2mを測る。床面には南よりの位置に、東西主軸で長楕円形状の炉跡が検出された。長径1.0m以上、短径0.6m、深さ0.2mを測る。炭化材は床面より僅かに上位で検出した。出土遺物はほとんどないが、床面直上より管玉1点が出土している。

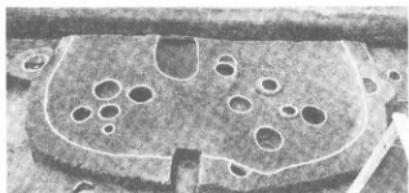


写真3 S H74検出状況

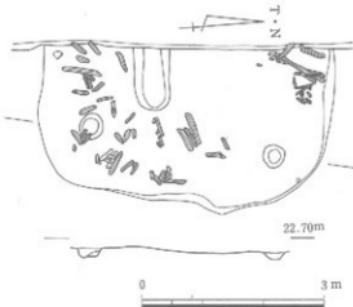


図6 S H74平・断面図 (1/80)

S H71 東水路④で検出した、長径約8.5mを測る、不整円形の大型の竪穴住居跡である。東西両端が調査区より外れるため約1/3しか検出できていない。床面上には上位層から切り込まれたピットが多数検出した。そのため主柱穴を特定するのは難しいが、2主柱穴を特定した。この主柱穴は焼土の小プロックが含まれており、径約0.4m、深さ0.2mを測る。床面中央には不整形な炉跡を検出した。長径1.5m、短径1.0m、深さ0.3mを測る。なお、住居跡南辺には幅の狭い壁溝が配されている。

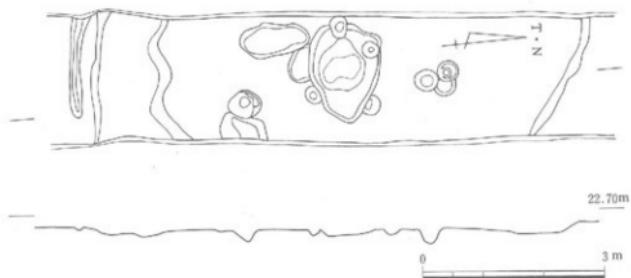


図7 S H71平・断面図 (1/80)

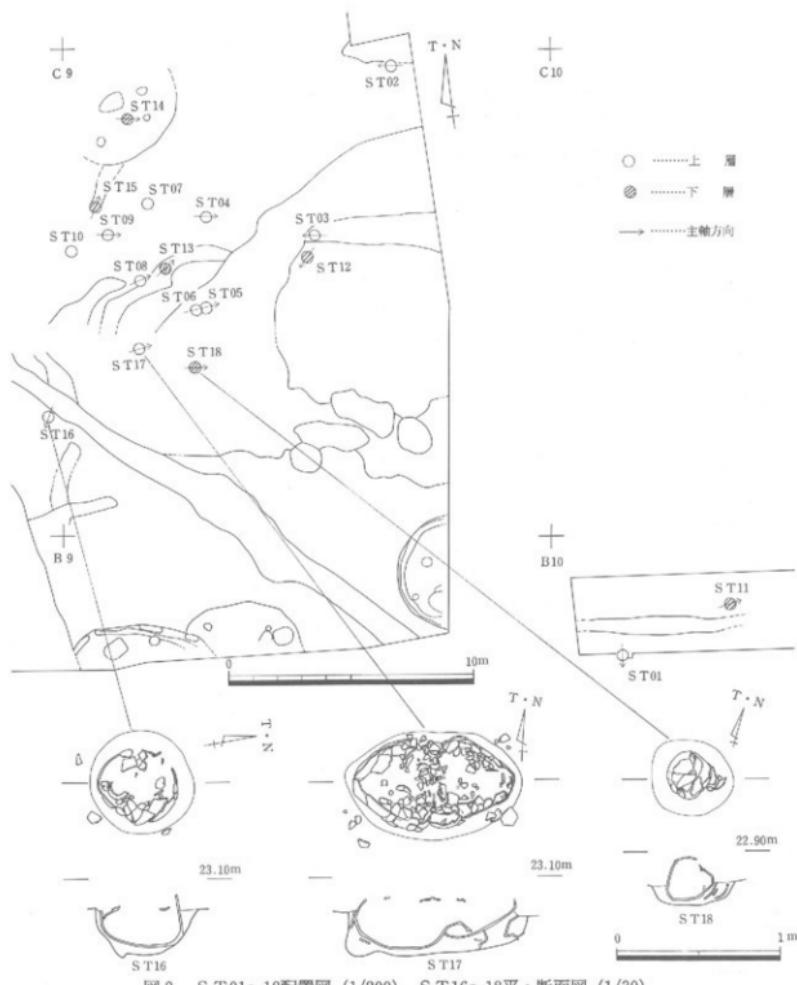


図8 S T01~18配置図 (1/200), S T16~18平・断面図 (1/30)



写真4 S T16検出状況



写真5 S T17検出状況



写真6 S T18検出状況

(図9-1)は広口壺の口縁部である。外上方に逆「ハ」の字状に開き、口縁端部には2条の凹線紋を施している。なお、内面には赤色顔料の跡を僅かに残す。(2)は平底の壺底部である。(3)は高杯の杯部である。外面に僅かにタタキ、内面にハケを施している。

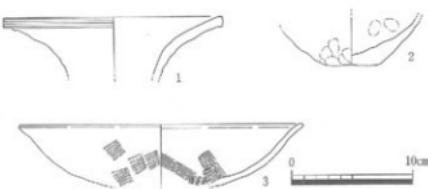


図9 S H71出土土器 (1/4)

S T 16~18 昨年度の調査では、II区東端部

から南北水路①区の西端部にかけての区域で、土器棺を主体部にする墓を15基検出している。検出面は弥生時代の包含層を挟んで上・下二面検出した。上位の検出面より10基、下位の検出面より5基検出している。今年度調査区のI区でも先の一群に含まれる3基の土器棺を検出した。

S T16は、長径1.1m、短径0.7m、深さ0.4mを測る大型の土器棺墓である。主軸方向は西に向く。包含層上面で検出した。棺に大型の壺を用い、蓋に壺の口頸部を打ち欠いた土器を使用しているタイプである。この土器棺の特徴は、棺の安定をはかるため、掘形と土器棺の隙間に土器片を詰めている点である。具体的には、蓋の底に壺の口徑部、棺の底部に壺の底部、棺の両側面に鉢等である。時期は土器棺の形状より弥生時代後期末頃と考えられる。

S T17は、径0.7m、深さ0.4mを測る土器棺墓である。主軸方向は南西に向く。包含層上面で検出した。棺に大型の壺を用いているが、蓋の形状は残りが悪く器種は特定できない。土器棺の形状より弥生時代後期末頃と考えられる。

S T18は、長径0.5m、短径0.4m深さ0.3mを測る小型の土器棺墓である。主軸方向は西に向く。包含層下面で検出した。棺に壺用い、蓋に鉢を用いている。そしてS T16同様、掘形と土器棺の隙間に土器片を詰めて安定をはかっている。時期は土器棺の形状より弥生時代後期後半頃と考えられる。

S D 28~30 IX区及び昨年度調査区のIII区で検出した、S R02より分岐して北西方向に伸びる溝群である。なお、これらの溝群の最終埋没段階では、褐色の洪水砂により埋没している。S D28は断面逆台形状を呈し、幅約3.0m、深さ約1.1mを測る。埋土は淡黒色系の粘土である。出土遺物は弥生後期の遺物が、溝の肩部を中心に出土している。なお、S D28はS D30及びS D29を切り込んでおり、これらの溝群中最も新しい時期の溝である。

S D29は断面逆台形状を呈し、幅約2.5m、深さ約0.8mを測る。埋土はS D28同様淡黒色系の粘土である。出土遺物は弥生後期の遺物を中心に出土している。なお、切り合い関係よりS D29はS D28により先行する溝である。



写真7 IX区全景

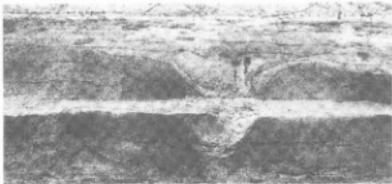


写真8 S D28・29断面



写真9 S D31土器出土状況(1)



写真10 S D31土器出土状況(2)

今年度のこれら
の溝群からは合計
約15箱の遺物が出
土している。出土
している土器には
かなり時期幅があ
るが、主体を占め
るのは弥生時代後
期後半～古墳時代
前期初頭の遺物で
ある。



図10 III・IX区遺構配置図 (1/400)

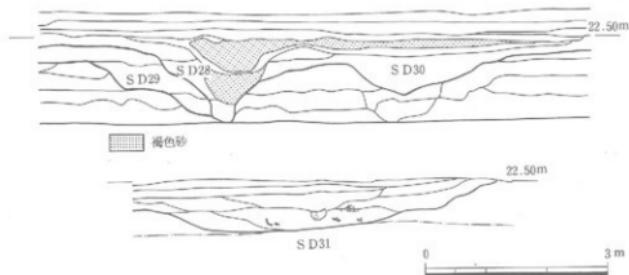


図11 S D28～31断面図 (1/80)

S D31 IX区北部で検出した、南に彎曲し東西方向伸びる幅広で浅い断面皿状の溝である。検出長18.0m、幅2.5～4.0m、深さ約0.3mを測る。埋土は淡黒色系の粘土である。この溝は配置及び遺物の出土状況より、昨年度調査をした微高地上的S D32、33等のいずれか溝と連続関係にあるものと考えられるが、合流部分をS R02が切り込んでいるため、その連続性を明らかにすることは出来なかった。

出土遺物としては弥生後期の土器が、ほぼ全域で多量に出土している。出土遺物をコンテナで数えれば約80箱を数える。(図12-1)は広口壺である。体部はやや球体化傾向があり、頸部は内傾気味に直線

状に伸び、口縁部は水平気味に外上方に伸びる。底部は丸底氣味の平底である。体部外上方はタテハケ、外下方はヘラミガキが顕著である。体部内面肩部にはオサエの跡が顕著である。内面下半部にはヘラケズリが顕著である。(2)は鉢である。底部は突出した平底、内面はハケを放射状に施している。(3)は台付の甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部はわずかに肥厚し退化した凹線紋が2条認められる。内外面にハケ調整が顕著である。脚台部にはオサエの痕跡が著しい。出土遺物よりこの溝は弥生時代後期後半頃であろう。

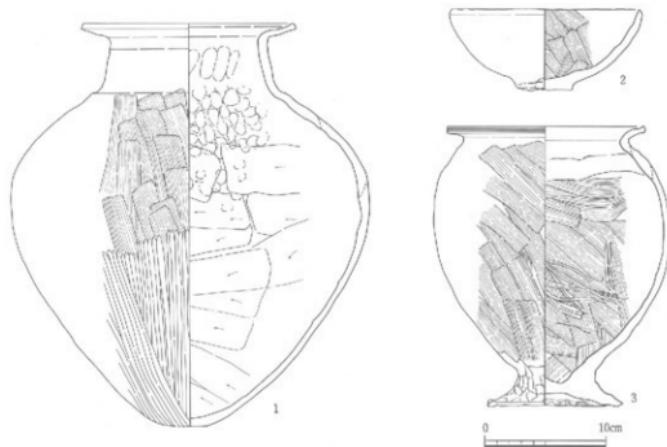


図12 SD 31出土土器 (1/4)

S R02 I・IX区及び昨年度調査区のIII区で検出した自然河川である。この河川は昨年度の報告ではSD 27として報告したが、本年度の調査で溝と考えるより河川と捉えるのが適切と考え名称を変更した。I区では直線状に東西方向へ、III区では北西方向へ向きを変え、更にIX区では蛇行しながら西へ向きを変える。幅4.0~7.0m、深さ1.1~1.3mを測る。埋土は淡黒色系の粘土が主体を占めるが、最終埋没の段階では褐色の洪水砂により大きく抉られた後に埋没している。

今年度の出土遺物は合計約110箱の遺物が出土している。出土している土器にはかなり時期幅があるが、主体を占めるのは弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の遺物である。

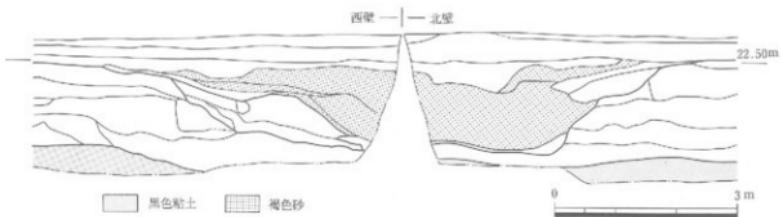


図13 SR 02断面図 (1/80)

S R01, S Z 03~07 S R01はI区及び昨年度調査区のII区で検出した自然河川である。S R01は北に向かい微高地を切り込む形で検出された自然河川で、北肩は検出できたが南の対辺は調査区より外れる

ため、本来の規模・形状など不明な点が多い。埋土は上層で灰褐色系の砂、中層で黒色系の粘土、下層で灰褐色系砂及びシルト等より構成され、最深部で約3.0mを測る。出土遺物としては弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺物が出土している。

S Z 03~07はS R01の下層で検出された堰状の遺構である。主軸方位で分ければ、真北より10°前後東へ向くS Z 03・06・07のグループと、真北より45°前後東に向くS Z 04・05のグループに区分できる。構造上の共通点は、斜材と斜材の間に長い横材を設置し固定している点にあるが、斜材の設置方法で二つのグループに区分できる。流路方向に従い西

遺構名	規 構 因			主軸方位	部 材 因			備 考
	全 長	最大幅	高さ		斜材 長	横 材 長	縦 材 長	
S Z 03	4.2以上	1.8	1.0	N 1° E	0.5~1.5	1.1~4.1		
S Z 04	4.5	2.8	1.1	N 47° E	0.5~1.8	1.8~3.2		
S Z 05	5.3	2.5	1.0	N 47° E	0.4~1.7	2.0~4.5		
S Z 06	2.7以上	1.5	1.0	N 13° E	0.7~1.3	0.5~1.3		
S Z 07	3.5	0.5	0.3	N 13° E			0.2~0.3	残りが悪い

表1 堰状遺構一覧



写真11 S R01-02全景



写真12 S Z 03~06検出状況

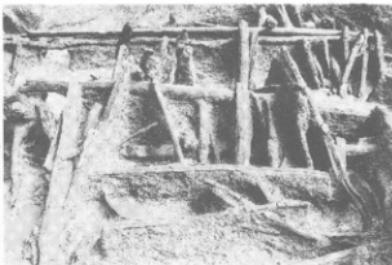


写真13 S Z 04-05細部



写真14 S Z 05細部(1)

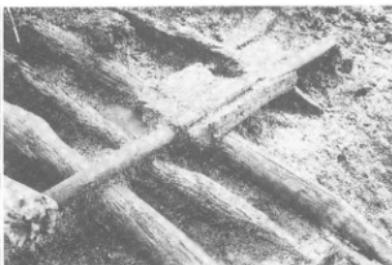


写真15 S Z 05細部(2)

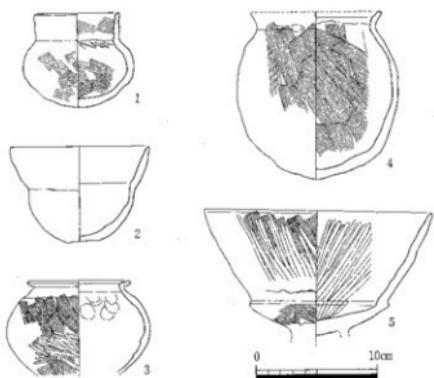


図14 S R01下層出土土器 (1/4)

た遺物を(図14)に図化した。(1)～(2)は小型丸底壺である。(1)口縁は直立状にのび、底部は丸底である。内外面にハケが顕著である。(2)口縁部は外上方に逆「ハ」の字状にのび底部は小さな平底である。(3)は底部に脚台が付く台付鉢かもしれない。(4)は小型の壺である。口縁は「ハ」の字状に短くのびる。体部は長胴気味で底部は丸底である。内外面にハケが顕著である。(5)高杯部である。口縁部は外上方に逆「ハ」の字状にのび、外面ハケの上にヘラミガキ、内面にはヘラミガキを放射状に施している。周辺より出土した遺物よりS Z03～07は、古墳時代前期初頭以降にあたる可能性が高い。

IV.まとめ

微高地の主要な遺構としては、弥生時代中～後期の竪穴住居跡7棟、弥生時代後期後半～後期末の土器棺3基を検出している。7棟の竪穴住居跡のうち、弥生時代中期中葉の竪穴住居跡は3棟を数える。出土遺物が乏しく、また整理が完全でないので詳細な点は触れないが、傾向として中期の竪穴住居跡は微高地の南辺に片寄る傾向がありそうである。また、竪穴住居跡の検出数は昨年度の検出数と合わせると計74棟を数える。II区から続く土器棺群は今年度の調査で3基の土器棺を追加した。昨年度検出点数と合わせれば計18基を数える。分布状況よりI区の土器棺が土器棺群の南限に当たる可能性が高い。

低地部の遺構の中で注目できるのは複数の自然河川、溝群と、S R01下層で検出された壠状遺構である。IX区のSD31は、比較的時期幅の限られた資料で、整理次第で基準資料になりうる。S R01下層の壠状遺構では、複数の壠を小範囲で検出した。検出状況より比較的の短期間に、S Z06→S Z04→S Z03・05へと移設しているようだ。なお、水の導入ルートは、S R01に隣接して西に伸びるS R02方向へ導かれた可能性が高い。また、先にも触れたが、壠状遺構からは建築部材と考えられる部材を比較的多量に検出している。柄穴をもつ部材、端部を有頭状に仕上げている部材、板等建物遺構の復元が一部できそうな資料である。これらの部材は、今後の整理作業において建物遺構の復元を前提にした資料操作が課題となる。

面方向に斜材を設置するS Z03・06と、西面方向の斜材を主にするが、やや合掌形に近いS Z04・05等である。また、壠の周辺には有機物を多量に含む粘質土を盛り上げ、壠の安定をはかっている。構築の順番を使用材の重複関係より推定すれば、最も古いのがS Z06、次にS Z04、最も新しいのがS Z03・05である。これらの壠状遺構に使用されている使用材は、大部分の物が杭状に整形している。また、これらの使用材の内、かなりの割合で建築部材を転用しているものが認められる。

S R01下層で壠状遺構周辺より出土し

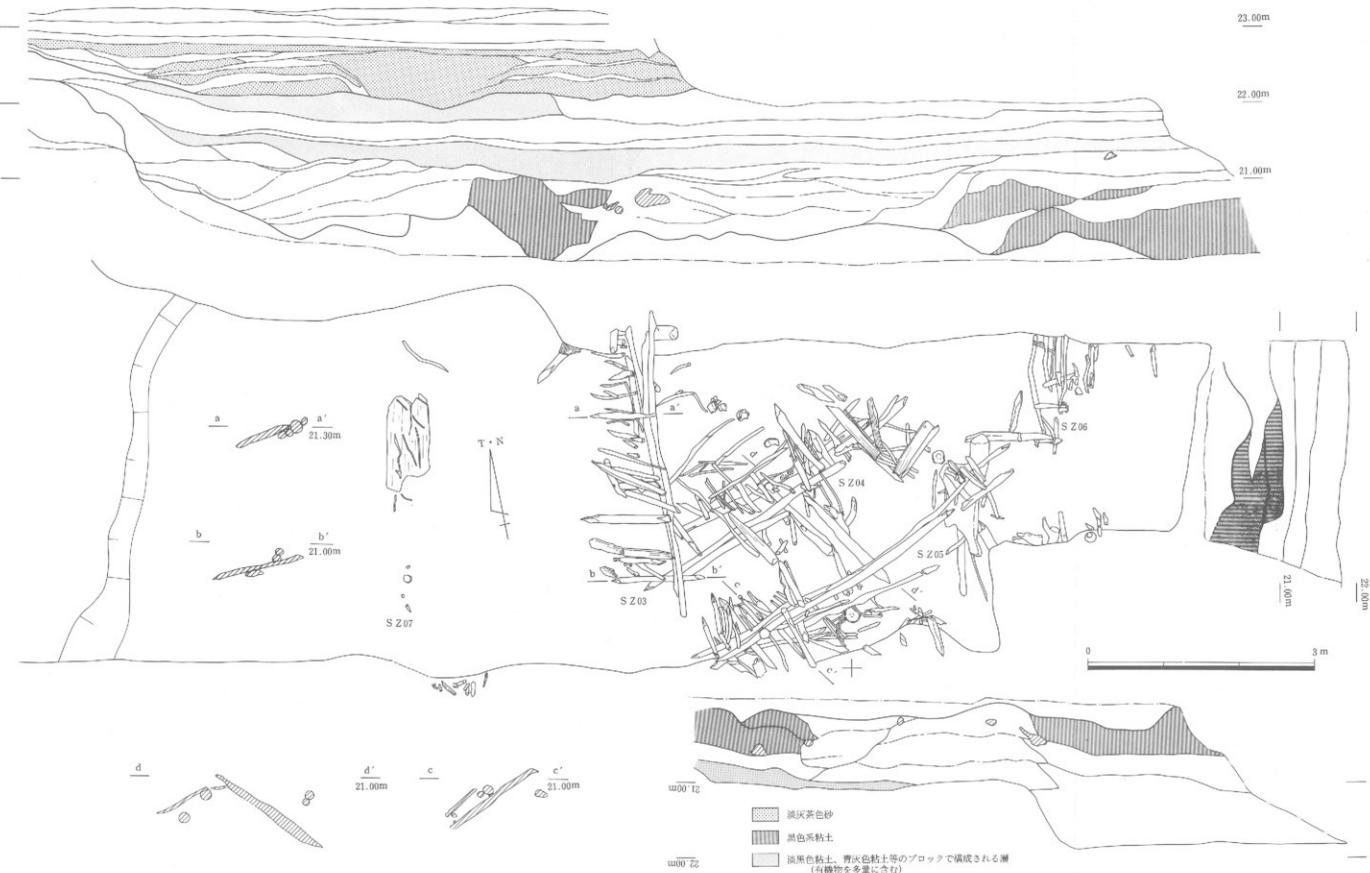


図15 S R01断面図 S Z03~07平・断面図 (1/50)



図16 鹿伏・中所遺跡 南半部 遺構配置図 (1/500)



図17 鹿伏・中所遺跡 北半部 遺構配置図 (1/500)

報告書要旨

ふりがな	しそくせ・なかしょいせき							
書名	鹿伏・中所遺跡							
副書名	高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
卷次	平成7年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	西村尋文・中村昭浩							
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒761 香川県坂出市府中町南谷5004-1 Tel 0877-48-2191							
発行機関名	香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
発行年月日	1996年3月31日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数	
20頁	4頁	16頁	1/6頁	0頁	15枚	17枚	0枚	
所取遺跡名	所取遺跡名	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町	遺跡					
鹿伏・中所	香川県木田郡 三木町 鹿伏			34度 16分 18秒	134度 8分 20秒	19950401～ 19950930	2,350	高校新設事業 に伴う
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鹿伏・中所	集落跡	弥生時代 中期	竪穴式住居跡	弥生土器 石器 石包丁 石鏡				
			土坑					
		後期～ 古墳時代	竪穴式住居跡 溝	弥生土器 土師器 石器				
	初頭	土器棺墓	木器	建築部材				
		壇状遺構		杭				
		自然河川						

高校新設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

鹿伏・中所遺跡

平成 7 年度

平成 8 年 3 月 31 日

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
〒762 坂出市府中町字南谷5001番の4
電話(0877) 48-2191(代表)

発行 香川県埋蔵文化財研究会

印刷 銀成光社